

心理尺度に対する「答えにくい」感覚を捉える 回答者個人の主観を問う定量的評価の試み

分寺杏介(神戸大学)・馬場絢子(金沢大学)・福島綾(一宮メンタルクリニック)

✉ bunji@bear.kobe-u.ac.jp

※本研究は、公益財団法人電気通信普及財団の研究調査助成を受けて実施しました。



▲スライド

背景

- 心理尺度への回答には、様々な認知プロセスをこなす必要がある
【例】CASM response model (e.g., Tourangeau et al., 2000)



- 特に臨床場面では、正しく回答できていないケースも (馬場他, in press)
▶ 個人ごとに異なる「答えにくさ」の原因に応じたサポートが必要
- 回答者ひとりひとりが尺度に対して感じる主観的な「答えにくさ」を定量的に捉えられるようなツールは十分に整備されていない

調査方法

クラウドソーシングを利用したウェブ調査

【対象】日本語母語話者500名

- 下記「回答困難項目」に6件法で回答
全く当てはまらない……非常に当てはまる
- 自身の回答内容をもとに、「回答困難項目」それぞれについて「答えにくさ」評価項目に5件法で回答
まったくそう思わない……非常にそう思う
- 平均回答時間、ストレートラインなどをもとに不適切回答は除外



▲デモ

回答困難項目(+不適切回答検出項目:S)

- 生活が光風霽月でないと感じることはない
- 出かけるときは身体が重い
- いつもより、それはどうしたんだろうと思う
- 野鳥観察をすると心が安らぐ
- 飛行機を操縦するとき、緊張より楽しみのほうが大きい
- 先週の水曜日は良い一日を過ごせたと思う
- オペラを見るなど、趣味や好きなことをしたい気持ちがある
- 友人知人に嫌味を言いたくなることがある
- 読書をしたり、体を動かしたりするのが好きだ
- いつも朝食をしっかり食べている
- S 私はパソコンを持っている

アイデア募集中

目的 回答者が感じる主観的な「答えにくさ」を定量的に評価できる項目案を作成し、分析例を示す

尺度項目

「答えにくさ」評価項目

【総合】ユーザビリティ尺度日本語版(山内, 2015)を元に作成(A1-A3)
【個別】先行調査(馬場他, in press)および回答プロセスの知見(Tourangeau et al., 2000)を元に「答えにくさ」の原因を具体化した項目を作成(B1-B7)

回答困難項目

評価項目に対応した「答えにくさ」を含むと想定される項目(1-8)を作成
▲ 下表中の枠付きが「想定」+「ダブルバーレル」「曖昧な副詞」を持つ項目(9, 10)

結果

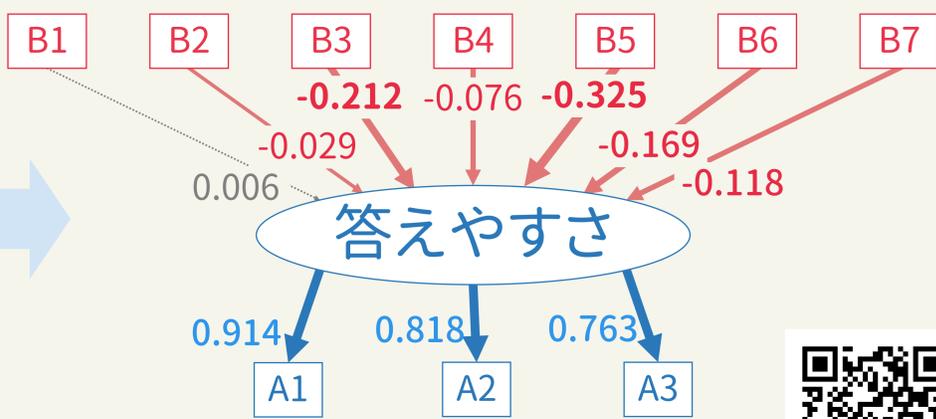
【各項目の平均点】5件法: 答えにくい ← → 答えやすい

「答えにくさ」評価項目		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	S
総合	A1 この項目は回答しやすいと感じた	1.49	3.94	1.79	4.19	2.89	3.10	4.06	3.71	3.54	4.71	4.85
	A2 この項目はたいていの人が簡単に回答できると感じた	1.68	3.87	1.94	3.99	2.83	3.00	4.01	3.74	3.56	4.54	4.81
	A3 この項目に正しく回答できたと確信している	2.08	4.21	2.44	4.33	3.50	3.55	4.26	4.07	3.87	4.71	4.88
個別	B1 この項目にはわかりにくい言葉が入っていると感じた	4.72	1.49	3.29	1.38	1.71	1.44	1.67	1.39	1.67	1.19	1.10
	B2 この項目への回答は、その時々で変わりやすいと感じた	3.02	3.49	3.77	2.19	2.21	3.34	2.42	3.10	2.61	2.13	1.41
	B3 この項目の意味がわかりにくかった	4.57	1.64	4.30	1.39	2.26	1.51	1.76	1.44	2.15	1.15	1.12
	B4 この項目は選択肢の違いがわかりにくかった	3.24	1.54	3.44	1.51	1.94	1.69	1.67	1.54	2.14	1.30	1.59
	B5 この項目が指す内容は想像しにくかった	4.37	1.73	4.26	1.74	3.16	2.64	1.86	1.81	2.10	1.24	1.11
	B6 この項目に関連することを思い返すのが大変だった	3.69	1.74	3.79	1.82	2.80	3.59	1.67	2.07	1.80	1.22	1.07
	B7 この項目に正直に回答するのをためらった	3.07	1.52	2.94	1.38	2.19	1.77	1.49	2.07	1.80	1.18	1.09

【マルチレベル相関】項目をレベル2として:対角成分は級内相関係数

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7
A1	0.453	0.751	0.696	-0.332	-0.201	-0.504	-0.371	-0.577	-0.488	-0.394
A2	0.998	0.425	0.614	-0.322	-0.177	-0.452	-0.325	-0.508	-0.432	-0.331
A3	0.995	0.991	0.395	-0.299	-0.174	-0.432	-0.356	-0.508	-0.455	-0.381
B1	-0.879	-0.864	-0.917	0.570	0.167	0.507	0.399	0.397	0.355	0.368
B2	-0.532	-0.514	-0.520	0.376	0.185	0.169	0.231	0.219	0.269	0.202
B3	-0.928	-0.913	-0.949	0.959	0.438	0.594	0.494	0.578	0.414	0.392
B4	-0.926	-0.911	-0.943	0.914	0.481	0.987	0.324	0.419	0.381	0.376
B5	-0.988	-0.992	-0.986	0.878	0.449	0.936	0.932	0.471	0.588	0.427
B6	-0.920	-0.938	-0.906	0.701	0.578	0.745	0.763	0.911	0.416	0.414
B7	-0.970	-0.955	-0.965	0.882	0.510	0.931	0.924	0.949	0.834	0.238

【マルチレベル構造方程式モデリング: Withinのみ】



Between

評価項目間の相関が非常に高くなってしまった

▲「総合的な評価(A)」に依存する傾向が強く、認知プロセス(B)間を併別した評価は難しい?

考察 総合的な「答えにくさ」に対しては、意味的な「理解」や「想起」の困難さが特に強く影響する?

項目・尋ね方のさらなる精緻化と、質的アプローチによる項目の妥当性検証が必要

▲例えば「思い出す能力に問題がある群」などでの検証

参考文献

馬場 絢子・分寺 杏介・福島 綾 (in press). 心理尺度回答におけるクライアントの「つまずき」と心理職のサポート. 心理学研究.

Tourangeau, R., Rips, L. J., & Rasinski, K. A. (2000). *The psychology of survey response*. Cambridge University Press.

山内 繁 (2015). エンジニアのための人を対象とする研究計画入門. 丸善出版



プレプリント